

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

朱家の悲劇

(家丑/FAMILY FEUD)

1994年・中国映画・100分

配給/東光徳間

2004 (平成16) 年7月10日鑑賞

<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004>

Data

監督: 劉苗苗 (リウ・ミアオミアオ)、
崔小芹 (ツァイ・シアオチン)

出演: 李万年 (リー・ワンニエン)
/ 王志文 (ワン・チーウエン)
/ 何冰 (ホー・ピン) / 吳丹
(ウー・タン)

👁️👁️ みどころ

放蕩息子の後継ぎに代わる息子を生むために、質屋の当主の第2夫人となったヒロイン。しかし、妊娠した彼女のお腹の子の父親は実は・・・？ 1930年代の江南地方を舞台に繰り広げられる『朱家の悲劇』は、あの張藝謀監督の名作『菊豆』(90年)とよく似た状況設定の中、女性監督特有の繊細な目で、古い中国社会の矛盾を見事に描き出している。2つの作品のうち、どちらの悲劇がより深い悲劇かを比べてみるのも一興だが・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<劉苗苗監督は第5世代最年少>

この映画の女性監督である劉苗苗は、1977年の文化大革命の終了後、1978年に再開された北京電影学院の第1期生で、陳凱歌、張藝謀、田壯壯らの同期生。しかし、彼女がその監督科に入学したのは16歳だったから、第5世代監督の中では最年少。

1985年に23歳の若さで『遠洋軼事』を監督し、1993年、『吉祥村の日々』(92年)でヴェネチア国際映画祭国会議長賞を受賞し、さらに最年少で寧夏映画製作所所長をつとめたとのこと。

<タイトルどおりの悲劇物語の始まり・・・>

『朱家の悲劇』とは、日本人にはすぐわかりやすい邦題だが、中国タイトルの『家丑』とは、「家の恥」という意味で、邦題よりもっと生々しいこの映画の本質を表現している言葉。そして、この「家の恥」とは、放蕩息子の次男チュー・ホイのこと。

チュー・ホイの父親チュー・ホアタン(李万年)は、江南で三大當舖といわれる質屋「裕和商店」の当主で、しっかり者。期待をかけていた長男は、日本への留学の旅の途中、不

幸にも生命を失ってしまったため、残った次男のチュー・ホイが、後継者にならなければならなかった。しかし、このチュー・ホイは、全く仕事をせず、家の金をクスねては遊び回る、放蕩三昧の生活を送る放蕩息子。チュー・ホアタンは、ほとほとこのチュー・ホイに手をやいていた。

＜幼なじみの3人の人間模様＞

ティエン・チー（何冰）とアーファン（呉丹）は、「裕和商店」の奉公人で、チュー・ホイとは同年代。3人とも子供時代だった1920年代も、チュー・ホイは学校をサボるデキの悪い子供だったが、しょせん子供のやることだから、タカがしれていた。そのため、後継ぎ息子と奉公人という立場の違いはあっても、この3人は仲良く一緒に遊んでいた。

しかし、1930年代に入って、大人になると、それぞれの人生は確実に分かれはじめた。チュー・ホイの放蕩ぶりは、大人になったためか、女郎買いとバクチが中心。「飲む、打つ、買う」の三拍子とまではいかなくても、後者2つだけでも相当な様子。

これに対しティエン・チーは、「裕和商店」の忠実な奉公人として少しずつチュー・ホアタンから認められ、蔵のカギをまかせられるまで出世（？）し、将来は番頭の地位に就くことも夢ではないという状況。

他方アーファンは、年頃になって美しく成長し、ティエン・チーから正式に結婚を申し込まれるまでに。しかし、このアーファンの存在（美しさ）と前述のチュー・ホイの放蕩のひどさが、朱家の悲劇を招くことに・・・。

＜舞台は江南の水郷のまち＞

映画では、その舞台は江南のある地方としか特定されていないが、美しい水郷のまち。「裕和商店」の裏側には、運河が流れており、移動はその運河を利用しての小さな舟に乗るもの。運河をまたぐ橋、運河を進む小舟、そして、この小舟を店につけるときの風景、これらはすべて、私が2004年6月10日～13日に杭州旅行に行った時、私がこの目で見た水郷のまち烏鎮での景色そのもの。なお、パンフレットによると、この「裕和商店」の再現については、杭州旅行の際に私が訪れた紹興の東浦鎮にある辛亥革命の志士・徐錫麟の故居を使用したとのこと。こう聞くとなお一層、親密感が増してくるから不思議なもの・・・。

北京など水不足で悩む北方のまちと比べると、中国の江南のまちは、すべて豊かな水に恵まれた美しいもの。この水郷によって江南のまちが栄えていたことが、この映画を観ているとよくわかる。映画や旅行によって、学ぶべきことがたくさんあることを、この映画を観て再確認！

＜口塞（含み玉）とは？＞

この映画を理解するのに必要な知識の1つが、口塞（含み玉）。これは、「清国の皇帝が逝去した際、その腐乱を防ぐために口に含ませた石」とのことで、私もこの映画ではじめて、その存在を知ったもの。

「裕和商店」は質屋だから、いろいろな客が質グサを持って訪れてくる。したがって、質屋の当主として大切な仕事は、質グサの鑑定。今なら、テレビで流行っている島田紳助司会の『開運！何でも鑑定団』を見て、知識をつけることができるかもしれないが、当時の中国ではそんなことはできず、経験をつむことしか方法はない・・・？

「裕和商店」に、この含み玉を質グサとして持ち込んできたのは、女郎屋の女将。彼女には、この含み玉の価値は全然わからないが、チュー・ホアタンにはピンときた。これは、ものすごい価値のものだ。さすが、ベテランの質屋当主のチュー・ホアタン。チュー・ホアタンはこれを二束三文の金額で、この女将からせしめることに成功したが、問題は、この宝物の保管場所。そこでチュー・ホアタンは、これを妻の寝室のタンスの中へしまい込むよう命じたが・・・。

<含み玉紛失事件の勃発>

今や、お店の蔵のカギをチュー・ホアタンからまかせられるまでに出世したティエン・チーだったが、今日は、店の棚卸しの日。つまり、店を休みにして、客から預かった質グサを総点検する日だ。この映画で描かれる、1920～30年代の質屋の営業の姿は興味深いが、それをみていると、何と時代遅れのシステムかと思うことがいっぱい・・・。

それはさておき、この棚卸しの時、あの大切な含み玉がない！血相をかえて、引き出しの中を探し回るチュー・ホアタンだが、ないものはない。ティエン・チーは、自分の責任を認めざるをえず、罰として与えられたむち打ちの処分を甘んじて受けたものの、自分が盗んだという濡れ衣だけは、許せないものだった。

この含み玉をもち出したのは誰か？チュー・ホアタンが含み玉のことを話したのは、その妻だけだったはず。ところが、この含み玉を気味悪く思った妻は、この含み玉の話を、何とチュー・ホイにしていた・・・！そこで、これは金になるとふんだチュー・ホイは、バクチの金を得るため、この含み玉をライバルの質屋への質グサに・・・。怒りまくるチュー・ホアタン、そしてチュー・ホイの背信に絶望するティエン・チー。

<第2夫人誕生のいきさつは？>

チュー・ホイのような放蕩息子の後継ぎしかいないのでは、チュー・ホアタンはお先真っ暗！そこで考えたのは、今からでも遅くはない！チュー・ホイ以外の後継者、すなわち息子をつくること！そして、たどりついた結論は、奉公人ながら、今は美しい娘に育ったアーファンを第二夫人として迎え入れて彼女に息子を生まれ、その息子を後継ぎにすることだ。

時代は、1930年代の中国だから、当主の意向は絶対。妻は夫の身勝手さにあきれながら、文句を言うものの、そこは「今更色恋ぎたではない！あの女は子供を生ませるための道具だ！」という、男にとって実に都合のいい理屈がまかり通ってしまう時代・・・。

これにビックリしたのは、アーファンと結婚すると心に決め2人で約束していたティエン・チー。ティエン・チーは直ちに結婚の許可をもらうべくチュー・ホアタンのもとを訪れたが、逆にチュー・ホアタンから「蔵のカギをお前に預ける」と言われたため、結婚のことは言い出せないまま・・・。仕事における当主からの信頼が大切か、それともアーファンとの男女の愛が大切かという二者択一を迫られた中、このティエン・チーは彼女を捨て、仕事（出世）を選択する決断を下したわけだ。

＜揺れ動くアーファンのオンナ心と後継ぎの誕生（？）＞

結婚を約束していたティエン・チーから見放され、子供を生むための道具としてチュー・ホアタンの第二夫人となって毎日を過ごすアーファンの心は、生きる目標を喪失し、悶々としたものだった。チュー・ホイにとって、このアーファンは、それまでの「奉公人」から「お母さん」に変わったが、チュー・ホイはこんな事態を冷やかに見つめながら、美しいアーファンに対する興味、関心は失うことなくずっともち続けていた。

それがある日、ひょんなきっかけから、ついムラムラときた（？）チュー・ホイは、アーファンに対して直接的行動（？）に・・・。アーファンは特別、「若旦那」のチュー・ホイが好きだったわけではなかったが、ティエン・チーは愛する自分よりも店での出世の途を選んでしまったし、あのジジイ（？）のチュー・ホアタンと比べれば、まだチュー・ホイの方がマシ（？）。多分そんな心境だろう。

そのため、チュー・ホアタンや奉公人たちの目を盗んで、チュー・ホイとアーファンは秘かに密通関係（不倫関係）を続けることに・・・。そして今日、アーファンは、その妊娠を知らされた。これを聞いて、驚喜乱舞して喜ぶチュー・ホアタン。しかし、アーファンのお腹の中にいる子供の父親は・・・？

＜『菊豆』とよく似た状況設定＞

このストーリーを観ていて思い出したのが、張藝謀監督の名作『菊豆』（90年）。これも、若い嫁の妊娠を聞いて喜ぶ染物屋の当主だが、実はその子は、甥と若い嫁の間の不倫関係によってできた子供だったという恐ろしいストーリー。そして、復讐のため、その子供の父親が誰であるかを告げられる当主、そのショックで中風になって倒れ動けなくなる当主、さらに、そこから次々とおこる悲劇的出来事、これらのストーリーは、この『菊豆』と実によく似た設定だ。まさに、古い中国社会におけるさまざまな制度の矛盾が、こういう状況設定の中に、見事に現われてくるわけだ。この『朱家の悲劇』は、女性監督らしく、繊細な神経で朱家の悲劇を描いているが、『菊豆』におけるこの染物屋の悲劇に比べると、

家業だけでも継続できた分、この映画の方がまだマシか・・・？

<危うく生命を失いかけた放蕩息子>

子供が生まれてくれば、大騒動になると考えたアーファンは、チュー・ホイに対して「一緒に逃げてくれ！」と頼むものの、根が浅い加減で、成り行きまかせのチュー・ホイは、ナマ返事のくり返し。そんな中、ある夜、チュー・ホアタンが寝入っているのを見とどけたアーファンは、秘かにチュー・ホイの部屋へ。チュー・ホイの部屋に入り込み、チュー・ホイに対して「一緒に逃げて！」と懇願するアーファンに驚いたのはチュー・ホイ。こんな場面が、チュー・ホアタンや奉公人たちにバレたらエライことだ・・・。

アーファンの口をふさいで、「落ち着け！泣き叫ぶのをやめろ！」と言い聞かせるチュー・ホイだが、思いつめたアーファンには、そんな軽い言葉は通用しない。もみ合う2人。逆上したアーファンは、チュー・ホイのベッドの上に掛けられていた剣を抜いて・・・？

夜中にチュー・ホイの部屋でおきたこんな騒ぎに目を覚ましたチュー・ホアタンは、第二夫人のアーファンが、こともあろうに、あの放蕩息子と不倫関係にあったと知り激怒！そして、チュー・ホイの部屋に入ってみると、そこは血の海で、変わり果てたアーファンの姿が・・・。そこでチュー・ホアタンは、蔵の防犯のため、かねてより購入していた銃を引き下げて、チュー・ホイのあとを追ひ、塀を乗り越えて、今まさに逃げていこうとするチュー・ホイに向かって、これを発射！さて、その成り行きは・・・？

<その数年後・・・？>

人間の身の上にはいろいろと起こっても、時は流れていくもの。数年後、「裕和商店」は、チュー・ホアタンの養子となったティエン・チーが、事実上店を取りしきり、中風で身体の動かないチュー・ホアタンはベッドの上で寝たきりの状態。

こんな「裕和商店」を訪れたのは、ある「お宝」を質グサとしてもってきた年配の男。彼はその質グサのいわく因縁を語りながら、1万円を要求。このお宝を鑑定したティエン・チーとチュー・ホアタンは、結局7000円でこれを引きとることに。もともと、その商談成立には、いったん交渉決裂を宣言して店を後にした年配の男が、折れて、再度店を訪れるというプロセスがあったが・・・？

そして、このプロセスの中、この年配の男は、白いスーツを来た男との間に、何やらインチキめいたトランクの交換も・・・？

<白いスーツの男は？>

そんな出来事後、ちょっとキザな、真っ白のスーツに身をつつんで、「裕和商店」を訪れたのは何と、あのチュー・ホイ。チュー・ホイは、7000円で店が引きとったあのお宝を買い戻すと宣言。さて、そのカラクリは・・・？ここらになると事態はかなり複雑で、

女性監督に似合わず、ちょっとミステリーな色彩も・・・。

他方、チュー・ホイは、今や店の実権を握ったティエン・チーに対してさまざまな工作も・・・。チュー・ホイの話を知っていたティエン・チーは、長年世話になったチュー・ホアタンを捨てて、チュー・ホイの話に乗るような雰囲気だったが・・・？

<キーマンの放蕩息子を演ずるのは王志文>

この映画のキーマンとなるのは、朱家の次男で放蕩息子のチュー・ホイ（王志文）。このチュー・ホイを演じる王志文は、1966年上海生まれで、1984年北京電影学院に入学し、1988年これを卒業した俳優。1994年に本作の他、『べこおしろい』（李少紅監督）と『デッド・エンド/最後の恋人』（Lou・Ye監督）の3本の映画に出演して人気は急上昇し、中国映画のアイドル的存在になったとのこと。

その後、この王志文は、陳凱歌監督の『始皇帝暗殺』（98年）では、ニセ宦官として後宮にもぐり込み反乱を起こすものの、秦王・政の討伐を受けて、極刑に処せられる、ろうあい（長信侯）役を、『北京ヴァイオリン』（02年）では、チアン先生の役を演じており、今や日本のファンにもすっかりお馴染みの顔になっている。

<朱家の悲劇！>

白いスーツ姿で、再度登場したチュー・ホイとのトラブルの中、チュー・ホアタンはある日ついに倒れ込み、帰らぬ人となってしまった。そんな中、ティエン・チーは、チュー・ホイに対して長年の怨みをこめて、チュー・ホイを打ちのめし、ついにチュー・ホイも血の海に・・・。何ともむごい朱家の最後だ。

時代は1930年代半ばのこと。そして、1937年からは、江南地方においても、本格的な日中戦争の開始だ。そんな日中戦争のカゲが忍び寄ってくる時代状況の中、今「裕和商店」では、ティエン・チーが名実共に当主となり、一切を取りしきっていた。

あれほど権威を誇り、江南地方の三大當舖といわれていた質屋「裕和商店」の当主であったチュー・ホアタンは今は亡く、放蕩息子のチュー・ホイもいない。そして、「世継ぎを！」と願って迎えたはずの第二夫人も、そのお腹の中にいたはずの後継者も今はもういない。

このように、朱家はすべて滅亡し、その栄華を誇った店は、今は奉公人であったティエン・チーの手に・・・。さて、ティエン・チーの手に移った「裕和商店」は、これから展開していく日中戦争の中、どのように変わっていくのだろうか・・・？

2004（平成16）年7月12日記